

ジャガイモと映画 (24)

<軍艦>

Web ジャガイモ博物館館長 あさま かずお
浅間 和夫

84. 『Uボート』

(原題：Das Boot、英題：The Boat)

1981年、西ドイツ映画。監督：ウォルフ
ガング・ペーターゼン。

原作は海軍少尉であったロータル＝ギュ
ンター・ブーフハイムの同名小説であり、
第二次世界大戦中の1941年末、大西洋を席
巻したドイツの潜水艦“Uボート”の艦内を
舞台にしたものである。ドイツの占領下に
あったフランスのラ・ロシェル港から、若
者ばかりを乗せたUボートが出航する。彼
らに与えられた任務は、大西洋を航行する
連合軍輸送船団への攻撃である。

本作の艦長のモデルとされるヴィレンブ
ロック大尉は初代U96の艦長を務めた人。
艦長（ユンゲン・ブッフノフ）は歴戦のベ
テランであるが故に、前線の状況も知らず
に大言壮語する上層部には冷ややかで、出
撃に浮かれる若い乗組員にも危惧の念を抱
いている。運良く発見した敵船団への攻撃
に戦果があったものの連合軍は対潜水艦戦
術を向上させつつあり、しだいに戦局がド
イツに不利に傾く中で、敵駆逐艦のソナー
音と爆雷攻撃の恐怖に追い詰められながら
も必死に闘う乗組員を描くものである。ク
リスマスには帰港できると思ったのもつか
の間、イギリス軍の地中海要衝であるジブ
ラルタル海峡を突破してイタリアに行け、



写真1 ドイツの潜水艦Uボート

という非情な指令がくる（写真1）。

このイタリアをめざす航海が長くなって
くると、壊血病対策の柑橘類はあるものの
缶詰、乾パンなどの保存食の比率が増えて
くる。そして、まず毛ジラミが確認され、
狭い密室の艦内には悪臭が充満し、汚れが
目立ち、乗組員の髭が気になってくる。花
キャベツ、ベーコンと一緒に出すと人気が
あったジャガイモの芽は伸び、黴が生えて
くる。そこで士官までがナイフでジャガイ
モの黴取りをするシーンさえ出てくる。よ
うやく、奇跡的にも死者を出さずに寄港は
できるが...

爆雷にやられ逃げ場のない海底の絶望的
極限状況の中での潜水艦乗組員の心理と戦
争の空しさをクールに捉えたものである。

85. 『眼下の敵』（原題：The Enemy Below）

1957年、アメリカ・西ドイツ映画。監督：

ディック・パウエル。

第二次世界大戦中の南大西洋にトリニダード・トバゴへ向け航行中のアメリカ海軍護衛駆逐艦「ヘインズ」の姿があった。そして筆者にとって嬉しくも、上映開始後最短時間新記録でジャガイモが出てきた。すなわち、甲板でジャガイモの皮を剥いている男に、軍医が『やあ、リングファイア。よく毎日ジャガイモが続くな』と話しかけると、『まだまだ、続くよ』と答えるシーンである（写真2）。



写真2 甲板でジャガイモの皮を剥く

民間出身の新任艦長マレル（ロバート・ミッチャム）が指揮していたが、出港以来艦長室から出てこない。乗組員たちは船酔いを疑い、“促成栽培のもやしに我々の命を預けられるか”と陰口をたたく。ある日の夜、ヘインズは浮上航行中のドイツ海軍のUボートIX型を発見し、追尾する。一方Uボートは、イギリスの暗号表受け取りのため、逃げ出すことができない。

マレル艦長は大胆にも敵に直角に艦を置き、Uボートの魚雷発射を誘う。1分48秒で着弾する前に艦の向きを変え、相手に2発を無駄にさせる。この成功で乗組員の態度に敬意が見られるようになる。

さらに、マレルはUボートに爆雷の波状攻撃を掛けて乗組員を心理的に追い詰める作戦にでる。一時狙い通りの混乱が生ずるものの、第一次世界大戦以来のUボート乗りであるシュトルベルクの人望で乗組員たちは正気を取り戻していく。聴音機からその様子を知ったマレルは、敵であるシュトルベルクに敬意を抱くようになる。一方のシュトルベルクも戦いを通じてマレルを好敵手と認識するようになり、駆逐艦の行動のパターンを分析し、爆雷攻撃の後に魚雷攻撃を仕掛け、命中させる。

マレルはそれを利用して、艦が戦闘不能なように偽装し、Uボートを海上に誘い込む。シュトルベルクは浮上させ、駆逐艦に対して「5分後に攻撃を開始する」と警告して退艦を促す。マレルはその時間を利用して砲撃に必要な最低限の人員を残して乗組員達を退艦させた後、稼働可能なエンジンを動かしUボートに砲撃を開始する。その後、両艦は衝突し炎上する。マレルは最後のシュトルベルクの救助を試み、両艦は仲良く爆沈する。

86. 『危険な道』（原題: In Harm's Way）

1965年、アメリカ映画。監督:オットー・プレミンジャー。

1941年12月7日、ハワイの真珠湾は日本の奇襲攻撃をうける。停泊中だった巡洋艦セントポール号のトリイ艦長（ジョン・ウェイン）は日本艦隊追撃の命令をうけて出撃したが魚雷をうけて損傷。海軍病院で手当てを受けることとなるが、看護婦マギー大尉（パトリシア・ニール）と知りあう。彼の上司の太平洋艦隊司令長官（ヘンリー・フォンダ）はかねてからトリイを信頼して

おり反攻作戦を一任することにする。

正義の味方のアメリカ軍が、太平洋で日本海軍の脅威と戦う話である。トリー大佐は片足を失い、マギーの優しい看護の姿があり、戦争経過を軸に、アメリカ戦艦の艦長と彼を取り巻く人々を描いたホームドラマであるが、筆者としてはオバノン(O'Bannon)という駆逐艦に関心があった。

1943年4月5日の夜、第21駆逐隊の僚艦と共に沿岸砲撃任務から帰投中だったオバノンは、ガダルカナル島の北西およそ48km付近で日本の潜水艦呂34が浮上しているのを発見する。至近距離で突然現れたため、体当たりを試み、その後呂34の真横に並ぶことになってしまう。潜水艦と判ったものの近すぎて主砲は使えず、超近接した潜水艦相手に戦う訓練をしたことがなかったため、とりあえず保存容器に入っていたジャガイモを目潰し代わりに投げてみる。しかし、日本軍の潜水艦乗員は手榴弾だと思って急いで駆け寄り、即座に投げ返す。こんな雪合戦、いやジャガイモ合戦を避けたのか、日本の呂34は慌てて潜行を開始する。船体がオバノンから離れ、火炮攻撃できる距離になり、司令塔に損傷を与える。逃亡しようとする呂34にオバノンは爆雷攻撃を加え最終的に撃沈させる。

投じたジャガイモが爆発したわけではなかったが、このポテト^{とうき}投擲チームのことはアメリカ国内にも伝わる。後日、メイン州のジャガイモ農家協会が『我々が生産したジャガイモで1943年春、日本潜水艦1隻を撃沈させたことを祝う』と書いた表彰状を



写真3 ジャガイモで船を沈めた表彰状

オバノンに贈った(写真3)。

太平洋戦争末期の1945年7月14・15日の晴れた日、小学校6年生の筆者は函館港内に停泊中の青函連絡船が襲来してくるグラマン戦闘機により一方的に次々と沈められていくのをただ見ていた。オバノンはこの時の航空母艦や、9月2日日本が東京湾で降伏文書に署名したあの戦艦ミズーリを護衛しており、後日の朝鮮戦争やベトナム戦争に従軍したことでも知られている。

追記:2019年2月香港警察の発表によると、香港にあるカルビー子会社の工場で2日、ポテトチップス用にフランスから輸入したジャガイモの中に第一次世界大戦時代のドイツ製手榴弾が紛れ混んでいるのが見つかり、警察が爆破処理して事無きを得た。これでも判る通り、手榴弾はジャガイモに紛れるほど似ているところがある。